

活動報告書

報告者氏名:盛光秀之

所属:川崎市立川中島小学校

記録日:2015年2月13日

【対象児の情報】

- 学年 小学6年女兒
- 障害名 読み書き障害(ディスレクシア)、注意欠陥障害
- 障害と困難の内容
 - ・書くことに困難さをもっているため、ノートをとることがほとんどできない。
 - ・読むことにも困難さがある、特に画数の多い漢字はほとんど記憶できていない。
 - ・注意欠損があり、持ち物が揃わず、約束なども忘れてしまう。

【活動目的】

- ・当初のねらい

iPad を使うことで自己解決の手だてを持ち、学ぶ意欲が向上することで、宿題や授業に取り組む時間が増え B 評価が取れるようになること。

- ・実施期間 2014年4月～現在
- ・実施者 盛光秀之 知念清志スチュワート
- ・実施者と対象児の関係 実施者:教務主任 協力者:担任

【活動内容と対象児の変化】

- ・対象児の事前の状況

- ◎授業中は机にうつ伏せになり姿勢の保持が難しい、書くことの困難さからノートをとることはあきらめている。
- ◎読むことにも困難さがあり、特に画数の多い(3年生以上)漢字は読むことができないので問題が理解できない。
- ◎図工や体育、音楽などは好きで自分から積極的に学習に参加している。
- ◎計算は理解しているが、書きの困難さから桁がずれていき不正解になることが多い。
- ◎理科には興味をもっているが、読み書きの困難さから自ら学習に参加することは難しい。
- ◎社会は歴史に入り特に苦手意識が強くなっている。
- ◎理科で読み上げてのテストを行ったところ、8割以上理解していた。

以上の状況より

対象児童の特徴として、文字情報からのインプット①と書くことのアウトプット②に困難さがあるが、聞いたことや見たことは記憶、理解する力があるので困難さを支えれば低下してしまった学習意欲が高まるのではないかと考えた。

・活動の具体的内容

- 取り組み①読みの困難さを支える

Voice of Daisy 国語・社会・理科の教科書を聞くことで理解へとつなげる。

Yahoo! あんしんネット 社会の調べ学習や理科の実験の様子を音声や動画で学習できるようにした。

○取り組み②書きの困難さを支える

7notes for iPad 書きの負担軽減のためにノートテイキングに iPad を利用した。

常用漢字筆順辞典 漢字の読みの確認や書きの練習のために使用した。

○取り組み③自己理解から周囲への理解へつなげる

本人と保護者への説明 決して怠けているわけではないことを伝えた。

学級の理解 児童アンケートの回答から啓発授業の実施へつなげ、周囲の理解を求めた。

・対象児の事後の変化

○取り組み①読みの困難さを支える

4月に対象児童と保護者、研究協力者とミーティングを実施した。その際に「Yahoo!あんしんネット」の使い方を説明した。Safari では有害情報に出会う可能性があるためこのアプリを選定した。音声入力での検索や音声読み上げの使い方、NHK for School を紹介して動画での学習も進めてみた。

その結果、6月に行った鎌倉の校外学習では自分で調べたことをもとに複雑な寺院の名前などを憶えていた。気になったことは調べるインプットの道具としてその後も活用をしている。ただ、家庭では動画をよく見るようになり母親が困っていたので、設定で動画を見られなくするか、または最初のミーティングで約束を作っておくことは必要だった。



6月のミーティングで「Voice of Daisy」の使い方を説明した。それまで学級では音読の宿題が出ていたが、対象児童の困難さからその課題はとても難しいものになっていた。そこで担任と相談してデジターを使って聞くだけでも宿題として認めてもらえるようにした。下のノートは母親にお願いして、対象児童が学習に向かった記録を残してもらったノートだが、これ以降のノートには毎日聞きながら国語の教科書を確認するようになったことがわかる。



今まで毎日学習に
取り組んだことがな
かったので母親が
喜んでいた。



○取り組み②書きの困難さを支える

書くことは読むこと以上に困難さを抱えていたので、ノートをとることはあきらめて授業中はいつも机に伏せていたが、「7notes for iPad」の使い方を夏休み中に指導して9月から教室へ iPad を持ち込んでからは、自分からノートをとることが増えていった。自分にもできることがあるという喜びからか、



声をかけなくても自分から入力することが増えていった。7notes for iPad の良さは文字認識力の高さだと考えていたが、最終的に彼女は50音タップ入力を選んでいたので、選択肢の幅があるという点もこのアプリの魅力かもしれない。

6年生の漢字はほとんど書くことが難しく課題に取り組むこともなかったが、夏休みの課題で漢字の問題が何枚か出されたことがあった。そこで夏休みの最初の頃に筆順漢字を紹介して検索の仕方や漢字の練習方法を紹介した。その後夏休み明けにあった時に確認すると課題は全て完了していて、「どうやってやったの。」と聞くと、自分なりの検索方法で漢字を探し、書字の困難さには動画を見ながら字を書いていた。対象児童は画数の多い字を見ると、どこをみているかわからなくなるようで困っていたが、動画だと動いている線を見ることに集中でき字をとらえることができていた。自分でもできると感じたので漢字のアプリを入れてほしいと希望があったので、いくつか入れたがミライブプロジェクトの小学6年生漢字ドリルが気に入ったようでコツコツ進めていた。対象児童が漢字を自ら練習することなどは、これまでなかったことなので、できることを用意する大切さを学ばせてもらった。



○取り組み③自己理解から周囲への理解へつなげる

1. 保護者と本人への説明

まずは、児童の困り感をヒアリングして、授業の様子を観察、ノートや提出物の確認、担任から聞き取り、保護者からの家庭での様子を聞いた個別の支援シートをもとに、改めて対象児童の困り感を説明した。読むことや書くことはできて当然と考えていた両親に理解を求めた。また、対象児童がみんなと同じようにしたいと努力してきたが、結果が出ずに悩んでいたことは本人の責任ではないことを伝えた。



2. 学級の状態把握

「みんなと違ってみんないい」とはよく耳にする言葉だが、子どもたちはそうは思っていないことが多い。「みんなと違ったら大変だ」少なくとも私が出会ってきた子どもたちはその傾向が強いように感じている。そこで教室でのiPad 利用に関しては、もしiPad を持ち込むとみんなはどう思うか？ということを中心にアンケートを作成した。アンケートの結果、iPad などの機器を持ち込むことはフェアではないという回答が20パーセントほどを占めていた。この子どもたちに対象児童の困難さを理解してもらえるように啓蒙授業を実施することを考えた。

3. 啓蒙授業の実施

授業ではアンケートの結果をもとに学級の状態を伝え、「教室で眼鏡を使うことはどう思いますか？」という問いかけから始めた。子どもたちの反応は当然良いと答えてくれた。その後、読み書きに困難さをもつ方を取材したNHKの動画を視聴した。そして、「この人が読み書きを支える機器を教室に持ち込むことはどう思いますか？」と質問すると、子どもたちは、努力して上達しない場合は良いのではないかという反応が返ってきた。そこで、対象児童の困り感を私のほうから話をさせてもらった。授業後の感想には「読み書きができない人がいることを初めて知った」「機器を使って学習ができるようになるなら使ったほうがいい」と事前アンケートでは否定的な意見を持つ子どもたちも肯定的な意見に変化していた。



4. 日常的な活動「違いは豊かさ」

その後は担任が学級の日々の授業の中で、対象児童だけではなく、機器を使ったほうが良い場合はいつでも貸し出すように配慮してくれ、誰もが困ったら支援を受けられること。違いは豊かさで、それをみんなで話し合えるような学級にしていくことを継続したことにより、この1年学級で起こるトラブルも少なく、穏やかに学校生活を送ることができている。こういった環境も対象児童にとっては必要だったと感じる。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

① 聞くことによって覚えた知識を生かすことができるようになった。

デイジーを使うようになってから、知識がしっかり定着するようになってきた。以前はテストの時に最初からあきらめることが多かったが、9月以降はテストの問題を読むことができなくても、問題を予想して解答することが増えた。もちろん、担任が読みあげてテストを実施することもあったが、そうでない場合もデイジーで聞いたものに関しては自力で答えようする姿を見ることが多く見られた。

② 自分のできることが増え、自主的に学習する姿が増えている。

iPad を教室に持ち込んだ9月からは、少しずつ手を動かすことが増えていった。iPad に入力するのも最初は慣れないことと、どれが自分にあった入力方法か(手書き認識、50音のタップ、フリック入力)を模索していたこともあり、急激な変化はなかった。しかしできることがあるということは大切であると実感したのは、その後少しずつ自分なりに入力方法を試しiPad でノートをとる回数が増えていったことである。



③ 周囲の理解が深まり、iPad だけでは支えきれないところは友達が支えてくれた。

iPad があっても対象児童の困難さがすべてクリアされるわけではない。例えば、板書された漢字が読めず入力したくてもできない場合もあった。ただ、そんな時も自分から「あれなんて読むの？」と友達に聞いたり、友達がフォローしてくれたりとい前には見られなかった様子を観察することができた。



・エビデンス(具体的数値など)

◎学習意欲の向上

・前期の理科の評価は全て B となった。以前は半分が C 評価

その他5年生の後期に C 評価だったが6年前期で B 評価となったものに社会の知識・理解がある。

・国語のテストでは1回問題を音声化して iPad を使うと8割理解できていた。この結果より、担任が必要に応じて読み上げるようなテストを実施したところ、国語のテスト(読み)はそれ以前のテストより得点率が上がっている。

読みのテスト得点率5年前期(37パーセント)→5年後期(17パーセント)→6年前期(52パーセント)→6年後期(68パーセント)*実施回数にばらつきがあるので一概に数字だけでの判断はできないが、あきらかに読みの理解は深まっている。

・今まであきらめていた家庭学習を進んで取り組むようになった。自分にできることがあることがわかり意欲的になった。

(漢字の学習、デジター、NHK for school など保護者の記録より)

・その他エピソード(画像などを含めて)

卒業文集も iPad を使うことを許可されたので、友達の助けも受けながら着々と進めた。困ったら友達が助けてくれることが増えた。と担任も言っているように周囲の理解が学習を支えている。



【今後の見通し】

読み書きの困難さを持つ本児童にとって ICT を使った支援は有効であることが認められる。ただ、まだ万能ではなく、初めて見る(もしかすると記憶に残ってない)漢字を黒板に書かれたときや、社会の付属資料(プリント)、学校独自で扱うプリントなど誰かがゆっくり説明してくれれば理解できるが一人の力では難しいことが多々ある。書くことや読むことの軽減につながるような支援は今後必要と考えている。又今回は取り上げなかったが算数にも研究を深める必要性を感じた。

○進学に向けて

現在対象児童は試験での合理的配慮を求めて中高一貫校を受験することとした。今までの積み重ねが薄い分、難しいことが予想されるが、今後保護者や本人が対象児の特性を理解して必要な支援を求めていくことが望まれる。学区の中学校には特別支援級の担任に本事例を説明して、進学が決まれば配慮を求めることができるよう進めている。